
ガンパレード・マーチ短編集

金城 ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンパレード・マーチ短編集

【Nコード】

N7502C

【作者名】

金城 ユウ

【あらすじ】

ガンパレードマーチの短編集です。まずは注意書きをお読みください。

本作品に対する注意書き

本作品に対する注意書き

1つ、本作品は、ガンパレード・マーチのパロディ小説集である。

1つ、本作品は、主にゲーム、ドラマCD、著者の脳内より設定を拝借しています。

1つ、カップリングに対する苦情は、一切受け付けません。

1つ、作品は、一話読み切りです。

1つ、一部、ネタばれにつながるモノもございますが、当方は一切の責任を持ちません。

1つ、書いたのが2003年度のため、賞味期限が切れている可能性がございます。食中毒等に対する対策は自己責任でお願いします。

1つ、本作品を読むことにより、幻獣が出現する可能性がございます。その時は現有戦力にて殲滅してください。当方よりの増援はありません。

尚、撤退は認めません。敵を殲滅するか、最期の一兵まで戦い、陣地を死守してください。

1つ、作者はこれらの作品にこれ以上、手を加えるつもりはありません（笑）

1つ、初期の作品ほど、著者の対する羞恥プレイとなっています（笑）

1つ、使用上の注意をよく読み、用法・用量を守って正しくお使いください。

では、『オール！ ハンデッドガンパレード！ オール！ ハンデッドガンパレード！ 全軍突撃！ たとえ我らが全滅しようともこの戦争、最後の最後に男と女が一人ずつ生き残れば我々の勝利だ！ 全軍突撃！ どこかの誰かの未来のために！』

2007. 9

絢爛舞踏 決意

静かなハンガー内で、原と森の2人が士魂号（複座型）を見上げている。

その静寂を破り、森が口を開く。

「撃墜数298。次で取りますね、速水君と芝村さん」

「そうね」

そう答えた、原の表情からは何も読み取れない。

「行かせて、いいのでしょうか」

その時、多目的結晶から召集の合図が送られてきた。森の答えが出る前に……

「厚志、舞、行くな。お前達が化け物になることはない」

瀬戸口の言葉に、その場にいた全員の視線が集まる。

みんなも、そう思っていたのかもしれない。

人として、友として、一緒にいて欲しいと。

その視線の中、速水の表情は穏やかだった。

「ありがたい。でも、映さんが戦死したとき、決めたんだ。戦争を終わらせるために……力なき人々の剣になろう。もう誰も死なせない。人の身で、できないなら、死を呼ぶ舞踏、決戦存在、人外の伝説。なんにでもなってやるって」

そう言って、微笑む速水の目には決意のほどが見て取れた。芝村も、いつもの様にうなずいている。口にするまでもない、と言うことらしい。

まだ何か言おうとする瀬戸口を、速水がさえぎる。

「みんな、歌ってくれ。僕等が、殺戮に、血に狂わないように、あ

の青臭い歌の、ガンパレード・マーチのような決意を忘れないように……」

その心は闇を払う銀の剣

絶望と悲しみの海から生まれでて

戦友達の作った血の池で 涙で編んだ鎖を引き

悲しみで鍛えられた軍刀を振るう

どこかのだれかの未来のために 地に希望を

天に夢を取り戻そう

われらは そう 戦うために生まれてきた

最初に歌いだしたのが、誰だったのかは、わからない。ただ、5
121小隊全員の歌声が聞こえた。

数ヵ月後

軍司令部への報告書には、5121小隊『戦死者0』の文字が見
て取れる。

これは、学兵の小隊としては唯一のものである。

絢爛舞踏 決意（後書き）

今より、さらに未熟な作品。

こんなものを最期まで読んでくれてありがとうございます。
マジで羞恥プレイの域だ。

願ったもの 未来を見る歌、送る歌（前書き）

ネタばれ、入っています。

願ったもの 未来を見る歌、送る歌

「嘘だ！狩谷^{かりや}が……嘘だ！」

うろたえる速水^{はやみ}の腕を握り、舞^{まい}が走る。

「速水、おのれの目で見たことを受け入れよ。信じたくないが事実だ」

「でも、でも……」

パシッ。

舞が速水の頬を引っ叩く。

「覚悟を決めろ、速水。このまま、何もせずにヤツに殺されるか。それとも、生きるために戦うか」

舞が速水の瞳を、正面から見据える。

「時間がない。急げ」

それだけ言うと、舞はハンガーに向かって走り出す。

その場には、頬を押さえた速水が取り残された。

「決まったか？」

コックピットに、飛び込んできた速水に舞が言う。

「わからない。でも狩谷を止めたい。彼に誰も殺して欲しくない」

「それでよい」

舞はそっけなく言い。発進準備を続ける。

「嫌、なっちゃん！」

悲痛な悲鳴にも似た、加藤^{かとう}の叫びが聞こえる。

今にも、幻獣の前に飛び出しそうな加藤を、のの^{たべ}みと田辺^{たべ}がしが

みつくようにして、止めている。

「まつりちゃん、めーなの」

「加藤さん、いっちゃダメです」

そんな三人に気がついた幻獣が、三人の方に向き直る。

「なっちゃん、うちや、祭や。わかるやろ。こんなん嫌や。元のな
っちゃんにもど……もど……」

最後のほうは、もう言葉にならない。ただ泣き声が漏れる。

しかし、幻獣は三人を一瞥し、魂すら凍りそうな声で言った。

「死ね」

口に、青白い光が集まる。

そして……

間一髪で、増加装甲を展開した三号機が割って入り、青白い光の
束（精霊リングブレス）を受け止める。

「舞！」

「安心するが良い。三人とも無事だ。今、来須^{くるす}が避難させている。
いかん！さがれ！」

舞の言葉に、頭より体が反応した。装甲を切り離し後方へ飛ぶ。
その瞬間、スキュラのレーザー攻撃にすら耐える、装甲が碎ける。

「速水、手加減しては、こちらがやられる。全力でいくぞ！」

「……わかった」

速水は、声をしぼりだすようにして答えた。

大太刀が、折れると同時に、三号機がしりもちをつく。所々、白
い血を流している。

「一号機、二号機は倒され、我等も武器がない。絶体絶命だな」

舞が苦しげに言う。

「まだだ、止めないと……」

しかし、機体がまともに動かない。

幻獣が、止めを刺そうと近づいてくる。

その様子を見て、五一二一小隊の隊員が、女子戦車学校の生徒達
が叫ぶ。

その時、三号機の右腕が青く発光した。

そして、幻獣と三号機が光に包まれた。

「精霊手……」

来須が呟いた。

「なっちゃん、嫌や、死なんといて!」

加藤が、狩谷の頭を抱きかかえ泣きじゃくっている。

「おかしなヤツだな。俺はお前たちを、殺そうとしたんだぞ」
傷の痛みにうめきながら、狩谷が言う。

「速水、お前さえいなければなあ。こいつを、祭をたのむよ」
静かに言って、目を閉じた。

狩谷夏樹十翼長 享年十四歳 公式文書には、幻獣との戦闘にて
戦死とある。

舞は、教室の前に戻ってきた。もう、午前二時をまわっているの
に、誰も帰宅していない。ただ、席に座り暗い顔をしている。

『わたしは今ひとりじゃない いつでもどこにあらうと ともに歌う仲

間がある 死すら超えるマーチを歌おう 時をも越えるマーチを歌おう』

……ガンパレード・マーチ？

速水が歌っていた。ガンパレード・マーチを一人で……

「舞」

速水が舞に気が付いて呼ぶ。

「加藤も、だいぶ落ち着いた」

「そう。今ね、狩谷が何をしたかったのかなって考えていた。何を願ってあんなことをしたのたか。なんて、結局本人にしかわからないけどね」

そして、さびしげに笑った。

「厚志、私を殴れ。私が、けんらんぶどう絢爛舞踏を取れと言わなければ、こんな事には、ならなかったかもしれない。私を殴れ」

「やだな。僕が決めたことだよ。後悔はしていない」

夜空を見上げる。綺麗な満月だ。

しばらくの沈黙の後、速水はガンパレード・マーチを歌いだす。

速水の歌声に、舞の歌声が重なった。

教室まで、速水達の歌声が聞こえてきた。

「ねえねえ、みんなで歌おうよ」

ののみだ。

「いつまでも、泣いていたら、めーなの。生きている人は、未来を見なくちゃめーなのよ」

速水たちの歌声に、のみのソプラノが軽やかに続く

「そうだな。みんなで狩谷を送ってやろうぜ」

滝川の大きな声が、つぶやくように瀬戸口が、一人、また一人と歌に加わる。

歌は、朝までやむことはなかった。

願ったもの 未来を見る歌、送る歌（後書き）

たぶんドラマCDを意識したのだと思います。たぶん……

はつきりと覚えていない…… 四年前だしなあ。

帰る場所 星従軍章 速水×森

「森さん」

「森」

「森りん」

「精華さん」

「精華」

「せいちゃん」

二つのお弁当と、コーラを持った速水が、恋人の森 精華を呼んでいるが、森は速水を無視している。

「はぁ」

速水は、上半身を士魂号の中に押入れ、整備をしている森の、Gパンにつつまれたおしりを見ながら、ため息をつく。

森を、怒らせるまねをした覚えはない。

浮気はもちろん、争奪戦も起きていない。

理由がわからないから、どう対処していいのかわからない。

しばらくして、速水は何か思いついた表情をして、森のおしりを、指でつついた。

「きゃっ」と言う悲鳴と、ゴンと（たぶん頭を打った）音が聞こえた。

「痛い！何するんですか！」

「やっと、こっちを見てくれた」

速水はそう言って、ニツコリと笑った。

森は、「うー」と、うなって速水を睨みつけている。

「僕、精華を怒らせるようなことした？」

「……降下作戦……」

森は、それだけ言うと、すねたようにうつむく。

「……でもそれは、軍機で参加パイロットの僕達と、善行司令、原

班長しか……あーっ、原班長！」

速水は、先ほど会った原の言葉『がんばってね。十六時まで、立入禁止にしてあげる』を思い出した。

「あなたが出撃した後、うちがどんな気持ちで待っているか、分かる？ 帰還した三号機が傷ついているのを見て、うちがどんな気持ちになるか、分かる？ いつか、いつか、あなたが帰ってこないかもしれないって、とても怖いのが、分かる？」

そう言って泣きじゃくる森を、速水がやさしく包むように抱きしめる。

「ごめん。でも、僕をもう少し信用してよ。この前だって、黄金剣翼突撃勲章と銀剣突撃勲章を取ったし、最近は士魂号も、壊していないでしょ」

そして、森にキスをする。やさしくて、長い、長いキス。

「ああっあっ」

首筋を這う、速水の唇に、声が漏れる。

だが、速水が服を脱がそうとした時、拒絶の言葉が出る。

「ダメ！ うち、汗臭い。だから……だから……ね」

「僕はかまわないよ」

いくら言っても、速水の手から逃れようとする。

「きたないから……いや」

キラキラと濡れた瞳で、上目遣いに、速水の目を見つめる。

媚びるような視線が、いじらしく。愛しいと速水は思った。

「そんなことない。ねえ、もっと僕を感じてよ。僕は、もっと精華を、感じていたい」

速水はもう一度、精華にキスをした。

森は、速水が脱がした服を着ている。

さっきから、顔を赤くして目を合わせてくれない。

「精華、僕は必ず生きて帰ってくるから。君のそばに……僕の、帰る場所は君のそばだけだから、信じてよ」

森が、うなづく。

今は、それで十分だ。

「じゃあ、先にシャワー室使ってよ。片付けは、僕がしておく」

森がハンガーから出て行き、後には片付けをする速水と森の残り香が残った。

速水は、すっかりぬるくなったコーラを取り、いきなり、部屋の隅に投げつける。

「そこ！善行司令！原班長！なにしてるんですか」
あたふたと、善行と原が逃げていく。

「ったく。油断も隙も無い」

しかし、速水の口元には、笑みが浮かんでいた。

森の居場所は、原が教えてくれた。

整備員詰所で、仮眠を取っているはずだ。

もう、夜明けまで一時間もないが……

「ただいま」

そう言って、速水は、精華を起こさないよう、その寝顔にキスをし、手に星をかたどった小さな勲章を握らせる。

僕が、関わった人間以外には、決して知られることの無い作戦で、戦い、生き残った証だ。

そして、速水は、森のそばで睡魔に身を委ねた。

帰る場所 星従軍章 速水×森（後書き）

ちよつとだけ、えっちい作品（笑

速水×森のカップリング、結構好きだったんですが、一番はやはり、速見×舞ですね。

まだまだ続きます。

決戦前夜 速水×舞

熊本城戦を明日に控え、校内は、活気にあふれている。

プレハブ校舎の屋上から、整備員達が走り回っているのが見える。休憩に出てきた速水は、そのまま横になり、夜空を見上げる。

目の前には、綺麗な星空が広がっている。

明日は、いや、もうすぐ日付も変わるし、数時間後には、戦場に移動する。

そのわりには、落ち着いているものだ、自分でも思う。慣れてしまったのだろうか。

かすかに、プレハブ校舎の階段を、上ってくる音がする。

この足音は、多分、恋人でもあり、同じ3号機のパイロットである、芝村舞のものだろう。

「ここにおったか、厚志」

「舞、星空が綺麗だよ」

舞は速水を、あきれた表情で見つめる。

「どうして、おぬしは、そう、ぽやんなのだ。少しは、芝村らしくできぬものか」

「あはは、周りがどう変わっても、僕は僕だからね。そう簡単には変わらないよ」

舞は、何も言わず隣に座る。

「舞、僕等もうすぐ、撃墜数3百だよ」

「絢爛舞踏か。私が人類の決戦存在になれと言ったこと、後悔しているのか？」

速水は、肩をすくめた。

「まさか」

「そうか、私は、後悔しているかもしれない。今回のことも、おぬしを失ったと思うと……」

「舞らしくないね」

速水の声は、いつもと変わらないが、そこにはもう、いつもの、ぽやんとした速水はいなかった。

「らしくないよ。僕は、舞のカダやだろ。なら、僕の命も、賭けて勝負しなよ。僕は負けないよ。君と同じ道を歩むと、決めたときからね。僕は負けないと、決めたんだ」

一瞬、ほうけた舞が、表情を引き締める。

「たわけ、ならば、そなたの力、見せてもらおう。明日の戦いでな。いくぞ厚志、はるかな高みへ」

舞は、立ち上がって、手を差し出す。

速水は、あの歌の、ガンパレードマーチの歌詞のように、舞の手を取った。

今なら私は信じられる

あなたのつくる未来が見える

あなたのさし出す手を取って

わたしも一緒に駆け上がろう

幾千万のわたしとあなたで

あの運命にうち勝とう

決戦前夜 速水×舞（後書き）

速水と舞の正当派コンビ。

この二人はカップリングは好きでしたね。

決戦前夜 瀬戸口×ののみ

「たかちゃん、なやみごと？」

考え事をしてた瀬戸口は、ののみの声で、現実に戻された。
「ののちゃんか。なんでもないよ」

「たかちゃん、うそはめーなの。たかちゃん、とても、こわいお顔
していたの」

瀬戸口は、少しだけ笑った。

見え透いた答え方をした。

どうも、自分らしくない。

「明日の事を、考えていたんだ。大きな戦いになる。ののちゃんは、
怖くないかい？」

ののみが笑って答える。

「ううん、へーきよ。たかちゃんがいるし、あっちゃんや、まいち
ちゃんもいるよ。それに、しょうたいのみんなもいるよ。だから、こ
わいものなんて、なにもないのよ」

「そうか、ののちゃんは強いな」

明日の戦いは、おそらく芝村が仕組んだことだ。

なにが、目的かは知らないが、激戦になることは間違いない。

もしもの時は……

「たかちゃん？」

「あつ、いや、ののちゃんは、ずっと俺が守ってあげよう」

「本当」

「ああ」

ののみに、笑いかける。

「たかちゃん、あのね、ののみねえ、おなかすいたの」

「じゃあ、味のれんに行こう」

瀬戸口は、ののみと手を繋ぎ、歩き出す。

空を見ると、満天の星空だ。

明日の夜も、こうして、この星空が見られるだろうか？
そんなことを思いながら、味のれんに向かった。

以下文字数が足りないので、水増しです。
ガンパレードマーチの歌詞

その心は闇を払う銀の剣

絶望と悲しみの海から生まれでて

戦友達の作った血の池で

涙で編んだ鎖を引き

悲しみて鍛えられた軍刀を振るう

どこかの誰かの未来のために

地に希望を 天に夢を取り戻そう

われらは そう 戦うために生まれてきた

それは子供のころに聞いた話 誰もが笑う

おとぎ話

でも私は笑わない 私は信じられる

あなたの横顔を見ているから

はるかなる未来への階段を駆け上がる

あなたの瞳を知っている

今なら信じられる

あなたの作る未来が見える

あなたの差し出す手を取って

わたしも一緒に駆けあがろう

幾千万の私とあなたで

あの運命に打ち勝とう
どこかの誰かの未来のために
マーチを歌おう
そうよ未来はいつだって
このマーチとともにある
ガンパレードマーチ
ガンパレードマーチ

決戦前夜 瀬戸口×のみ（後書き）

個人的には、瀬戸口と壬生屋の方が好きなんです。でも今回はのちゃんがパートナーです。

決戦前夜 善行×原

「委員長。補給隊から、物資が届いています」

善行は加藤からリストを受け取る。

「こんな時間にですか」

時計は23時をまわっている。

「明日の作戦に参加する隊には、今日中に届けているみたいやね」
善行はリストに目を通す。

各種武器弾薬の下に、重ウオードレス『可憐』が二体と、ウオードレス用の武器が、いくつかリストアップされている。

陳情者の欄に、小杉と新井木の名前が見て取れる。

「小杉さんはともかく、なぜ新井木さんなのです」

「委員長、知らなかったん。最初は、来須十翼長目的でしたが、いつの間にか若宮十翼長といい感じですよ」

「まあ、いいでしょう」

受領のサインをする。

「では、加藤さん。若宮、来須両名に可憐の調整を、急がせてください」

加藤と入れ替わりに原がやってきた。

「あなたが、ここに来るとはめずらしいですね」

「なに言ってるの、必要以上にハンガーに来るのは、あなたでしよう」

「あなたも、あなたの部下も、ほっとくと根をつめすぎますからね」
善行は、原から書類を受け取り、目を通す。

「後は、パイロットとの調整だけです。明日は整備班も、前線近くまで出てもらいます。交代で睡眠を取るようになってください。」

書類にサインをし、原に手渡す。

「ところで、夕食がまだでしたら、ご一緒にいかがです」

「あら、それは命令かしら、それとも、お誘い」

原が切り返す。

「私はよくばりでね。両方です」

「そうね、あなたのおごりなら、付き合ってもいいわ」

原と肩をならべて、歩くのは、何年ぶりだろうか。ふと、そんなことを考えた。

「きれいな星空ですね」

「……そうね」

彼女の命を、芝村の手から守るためとはいえ、何も言わずに姿を消したのだ。

それこそ刺されても文句言えない。

「私と、もう一度……いや、明日、生き延びることが出来たら、もう一度、誘ってもよろしいですか」

多分、この後の彼女の台詞は、分かっていた。

決戦前夜 善行×原（後書き）

善行と原さんです。原と善行の間には、何があったのだろう。という発想から書きました。

お付き合いしていたらしいのですが、詳細は不明です。
（と、当時のあとがきにありました）

決戦前夜 芝村準竜師×更紗

「フフフ・・・ここまでは、予定通りだ」

「勝吏様」

副官の更紗が立っていた。

他人が見たら、おそらく同じ感想を抱くだろう、美女と野獣と。

「更紗、首尾はどうだ」

「いよいよ明日だ。フフフハハハ」

勝吏は、上機嫌で高笑いする。

「しかし、5121小隊に負担がかかり過ぎます」

更紗が不安げな顔をする。

「いや、これでよい。5121に、いや、速水厚志百翼長に膨大な数の幻獣をぶつける。これで、我等の願いがかなう。決戦存在、ヒーロー、戦いに終結をもたらす者……いよいよ明日。生まれ出る。フフフハハハ……」

しばらく、笑った後、勝吏は更紗に向き直りこう言った。

「ここにあるウイルスセルと、お前の靴下。交換せんか」

勝吏の顔面に、更紗の鉄拳がめりこんだ。

以下、文字数不足のため水増し。

人型戦車の説明

士魂号

AMTT-519M。ザ・スピリットオブサムライ。士魂号M型。身長9m、乾燥重量7.5t。

人型戦車であり、動力は人工筋肉、燃料はタンパク燃料で単座型。換装による通常型、軽装型、重装型のバリエーションが存在し、既存の戦車にはない機動力・運動力と、ありとあらゆる装備を利用することが出来る器用さを持つ。しかし二足歩行のためあまりにも整

備性が悪く、普通の戦車の3倍の整備兵が必要とされ、故障も多いことから、一般的には欠陥兵器扱いされている。制御系の部品には整備兵も開ける事のできないブラックボックスが多く、秘密の多い機体。5121小隊では1番機、2番機がこの機種。

士魂号複座型

AMTT-519MW。ザ・スピリットオブナイト。正式名称は騎魂号。

士魂号Mの複座型。複座のため単座とはシルエットが大きく異なり、厳密には人型とは言えない。機動力は単座型には劣るが高い情報処理能力を誇る。突撃仕様と電子戦仕様が存在し、突撃仕様は背中に地対空両用ミサイルランチャーを、電子戦仕様はジャマー（無線誘導兵器を無力化する）などの支援装備を持つ。5121小隊では3番機がこの機種。

士翼号

AMTT-526。ザ・ウイングオブサムライ。

単座型の新型機。圧倒的な機動力と攻撃力を持つが、その開発経緯には謎が多い。士魂号と比べて圧倒的に細身かつ技術的な繋がりを感じさせないフォルムと、アルカイックスマイルを浮かべた頭部が印象的。ゲーム進行によって5121小隊に配備される事がある。装備は士魂号に準ずるが、運用次第では無手でも多大な戦闘力を発揮する。

決戦前夜 芝村準竜師×更紗（後書き）

芝村勝吏準竜師と副官のウチイタ・更紗お姉様です。

個人的に、決戦前夜4作の中では、一番のお気に入りです。でも、一番短い（笑）

残念なのは、シリアスなままでおわれなかったこと。

いくら、考えてもこんな終わり方になるんだもの。あの容姿のせい
か（苦笑）

青の伝説 熊本撤退戦

1999年5月、5121小隊は壮絶な撤退戦の最中にいた。

3月からの戦いにおいて、芝村舞、東原のみ、狩谷夏樹の3名が戦死。

来須銀河、行方不明。

善行忠孝、加藤祭が、部隊を離れた。

現在、司令に若宮康光が付き、田代香織、茜大介、東原希（のみタイプ）が補充され3号機に、壬生屋未央、瀬戸口隆之の両名。

そして、1号機に青く塗装された士翼号を駆る、速水、いや、今は芝村を名のる厚志の姿があった。

「こちら尚敬高校戦車小隊。敵と交戦中。来援お願いします」

「きゃ」

悲鳴とともに、車内に衝撃がはしる。

「車輪を、やられました。動けません」

目の前に、スクюраが見える。

「こんなの、YESじゃない」

その言葉とともに、スクюраが光に包まれ、四散した。

思わず「へっ」と声が漏れた。

「5121小隊所属の厚志百翼長だ。芝村をやっている。そちらの指揮官は誰だ」

目の前に現れた、青い士翼号からの通信だ。

「はい。悠木映十翼長です。5133小隊、3号車の戦車長です」

「では十翼長。北に500mの地点で、我が隊が、退路を確保している。合流してもらおう」

「了解しました」

映は士翼号に向かい、敬礼をし、生き残りを連れて、北へと走り

出した。

視界の隅から、久遠の小さな影が消えていく。
レーダーには、100を超える幻獣が映し出されている。
まだ、射程距離外だが、士翼号なら一瞬で白兵戦距離まで詰める
ことが出来る。

「いくよ」

厚志の言葉を聞いた、イトリが歌いだす。
その歌を聴きながら、厚志は士翼号を跳躍させた。

「……以上の物資を、お願いできませんか。斜樹準竜師。^{ななめぎ}」

「貴様……」

「そんな顔しないで下さい。ひとつのネタで、何度もたかるつもり
は、ありません。取引としては高くはないでしょう？」

「……」

「それとも、その権力、失ってみますか？」

厚志の口元は笑っているが、目は笑っていない。

「斜樹準竜師。断るのは自由ですよ。僕は、断るとは思っていません
がね。では、いい返事お待ちしています」

形だけの敬礼をして、通信を切る。

「さて、立ち聞きなんて、いい趣味とは言えないね」

厚志が言うと、入り口から一人の少女が入ってきた。

「たしか、悠木映十翼長だったね。今聞いた話、他言しないでくれ
ないか」

厚志は冷たく笑う。

「こんな危ないこと、YESじゃないよ。やめたほうがいいよ」

「言っていないかった。僕は芝村なんだ。目的の為に、手段は選ば
ない」

映は動けなかった。

厚志はただ立っているだけだが、まるで首筋にナイフを当てられ

ているようだ。

「よお、アッキー」

固まっている映に、瀬戸口が抱きつく。

「映、俺からもたのむよ。それから速水。右手の物騒なもの使うなよ」

厚志は映に笑いかけた。

先ほどとは違い、やさしい笑顔だ。

「僕も、自分の甘さを再確認していたところさ」

瀬戸口に拳銃を渡し、厚志は、士翼号に向かった。

「速水君は中？」

原が森にたずねた。

「ええ、あの日から毎日です」

「私ね、あの娘に、芝村さんに、男なんて一番好きな女の子が奪ってもいいことになっているって言ったのよ」

原が悲しげに笑う。

「本当に奪って、いっちゃった」

厚志は、士翼号の中にいた。

「いったい、僕は何をやっている」

いらだちから、言い放つ。

「一番大事なものを失ったんだ。世界ぐらい手に入れないでどうする。非情になれなくてどうする」

それは、約束。もう果たされることのない彼女との約束……

厚志は、腕に巻かれた紅い布に触れた。

「舞、君のいない世界は、冷たいよ」

そう呟くと、厚志はひざを抱えた。

1週間後。

5121小隊は、北九州まで撤退していた。

「くそ！完全に囲まれた」

若宮がはき捨てるように言う。

モニターには、幻獣に囲まれた自分たちが映し出されている。

「若宮、周囲の部隊をまとめて、北側を貫け。しんがりは僕がやる」
厚志が、当たり前のように言う。

「しかし、上級万翼長。下手をすると、包囲殲滅されます」

「僕がやると思ったんだ。それはない。まだ、北側が薄い内にやらないと、チャンスがなくなるぞ」

「わかりました。早速かかります」

厚志は、うなずいた。

「うわー、こちら滝川^{たきがわ}、ス、スキュラに囲まれた」

「滝川、5秒持たせろ」

言い終わる前に、土翼号を跳躍させた。

5体のスキュラから、逃げ回る滝川機が見えた。

土翼号の手に、炎の剣が現れる。

一振りで、5体のスキュラがチリと化した。

「滝川、先に行け！僕が、時間を稼ぐ」

「で、でもよう」

「滝川、山口で会おう」

土翼号の親指を立てて見せる。

「おう、山口で」

滝川機が北に向かって走り出す。

「イトリ、絶技を、リン・オーマの防壁を頼む」

イトリが頷くと、厚志は、土翼号を幻獣の群れの中に突っ込ませる。炎の剣により次々と嚴重が消滅していく。

幻獣の群れの中を駆け抜ける姿は、まるで青いイマズマのようであつた。

激しい戦いの中、厚志が呟く。

「舞、君に世界をあげる。だから、僕は死なない。そう、幻獣と、僕らを利用した者たちを滅ぼすまで」

1999年5月。

人類は九州より完全撤退。

しかし、戦争は続く。

青の物語はまだ、始まったばかりである。

青の伝説 熊本撤退戦（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回の話は『夢散幻想』がベースになってます。

来須君は、生死不明だったので、行方不明にして、祭ちゃんも部隊から離れたことにしました。

抜けた人の分を、埋めるつもりで、田代、茜、ののみタイプを出したんですが、出番なし。（笑）

出番あったんだけど、悠木映ちゃんに取られちゃいました。

さて今回の話だけ、2話構成です。次回の『青の伝説 反抗作戦開始』でお会いしましょう。

青の伝説 反抗作戦開始

2000年3月、山口県小野田。

「滝川百翼長、そいつで最後だ、逃がすなよ」

「わかっているよ、茜司令。これで、アルカナだ！」

滝川機がライフルで、きたかぜゾンビを落とした。

「おめでとうございます。滝川先輩」

整備士達が、声をかけてくる。

5121小隊も、だいぶ人員が入れ替わった。

自分以外には、司令の茜大介と、整備主任の新井木勇美だけで、他の者は今年徴兵されたものがほとんどだ。

「バカゴッグル！」

声と同時に、コーラが飛んできた。

受け取ったコーラはよく冷えていた。

「汗流したら、司令室にこい、だって。ほら、あなた達も整備はじめる」

新井木が整備士達に指示を出す。

すれ違いざま、滝川が「サンキュ」と声を掛けると、新井木も「おめでとう」と、小さな声で返した。

「豊浦が落ちた。今後は豊北、美祢、小野田を結ぶ線が、新しい防衛線となる」

司令室で、滝川と新井木に伝えられた情報は、予測できたこととはいえ、ショックなことであった。

「あそこには、遠坂と田辺がいたよな」

「部隊は全滅したが、二人は無事だそうだ」

滝川の問いに、茜が答える。

「ねえ、あの二人、うちに引っ張れない。人型になれているメカニックスは貴重だし」

滝川が、少し考えて言う。

「厚志に頼むか、新井木」

「え、厚志君」

「今、竜師らしいからよ。芝村の力をうまく使っているみたいだ」

「それなら、僕も知っている。善行と色々上のほうでやっているみたいだな。一体なにをやっているのだから」

茜がため息をつく。

「でも、頼むなら、新井木のほうがよくないか」

と、滝川。

「ぼく、いやだな。今の厚志君、別人みたいだもん」

新井木が表情を曇らせる。そこに、

「本日付で、5121小隊に配属になった。悠木映百翼長です。ん、どうしたの？ そんな暗い顔、YESじゃないよ」

「竜師、遠坂と田辺、両百翼長を5121に配属するよう手配しました。明日辞令が出ます」

「ご苦労だった、善行準竜師。これで5121も小隊としての形になっただろう」

「滝川百翼長がアルガナを取ったそうですよ」

厚志は意外そうな顔をした。

「滝川が…… 思ったより早かったね。確か去年が86だったと思うけど」

「ええ、今月だけで64の撃墜です」

「そうだ、僕からも祝いの品を送ろう。何が良いと思う善行」
厚志は楽しそうに笑った。

士翼号の前に立つ厚志の前に、岩田が現れた。

「あなたは、何を望むのです」

「世界を……」

厚志が答える。

「だが、その前に、僕と舞を利用しようとしたヤツラを叩く。どのみち僕の邪魔をするんだ。その前に潰す。岩田、僕と共に来い」

厚志が右手を差し出す。

「フフフ、もし断ったら」

「無理強いはしない」

岩田は厚志の右手を握った。

「いいでしょう。貴方は舞を、私のシオネアラダを守れなかった。それなりのことはしてもらいますよ、青。完全なる青のあなたには」

「うおー、すげー、この士魂号、新型か」

納入された士魂号の前で、数人の整備士と滝川が騒いでいる。

「違いますよ、滝川君」

「遠坂に田辺さん」

声に振り返った滝川が目丸くする。

「この機体は、滝川君用にカスタムされたもので、狙撃仕様と言うところですよ。専用のスナイパーライフルもありますよ」

遠坂の言葉を継いで田辺が言う。

「速水君に頼まれて持ってきました。アルガナ取ったお祝いだって」

「あいっ…… うおー、早速乗ってみるぜ」

言うが早いか、階段を駆け上がる滝川、何か言おうとした遠坂と田辺は顔を見合わせた。

そして、滝川がコックピットに飛び込む。

一瞬の沈黙の後、「いっ・・・ いっ、岩ギャー！」コックピットで最終調整をしていた岩田に気づかず、飛び込んだのだろう。

おまけに、ハッチまで閉まったらしい。パニックになった滝川の悲鳴はしばらく続いた。

「滝川機、ミノタウロスを撃破。悠木機ゴルゴーンを撃破。敵、撤退します」

指揮車の中に、ののみタイプ、東原望のソプラノが響く。

「5分で撤退に追い込むとは、やりますね彼らも」

「敵、第2波きます」

「あれぐらいの敵、自力で倒してもらわねば困る。善行、後の指揮を頼む」

「また、ご自分で出られるのですか。竜師」

「僕のいるべき場所は、最前線だ。他にもあったかもしれないが、今はない」

厚志が出て行くのを見送りながら、善行がつぶやく。

「結局は、過去にしばらくたままか」

「きゃ！」

悠木の1号機が、ミノタウロスの攻撃を受けてしりもちをつく。

「悠木さん、さがれ！」

ミノタウロスと1号機の間、滝川機が割り込み、アサルトライフルを乱射する。

「くそ！きりがねえ。茜なんとかしてくれ」

「3号機、鷺ノ宮。1号機と2号機の支援。スモーク弾急げ！」
茜の指示が飛ぶ。

「1号機、補給車までさがれ。新井木、今から1号機が行く、補給と応急処置、5分でやれ！」

戦況は膠着状態だ。だが、士魂号L型やスカウト達ではいささかが悪い。少しづつではあるが、防衛線に穴があき始める。

「茜司令、敵の第5波来ます。か、数おおよそ……」

「どうした、数はいくつだ」

「おおよそ、2500」

「敵増援来ます。数おおよそ2500」

東原の声が響く。

「そろそろいくか、壬生屋、瀬戸口」

両脇に、赤と銀の士魂号を連れ、厚志が青い士翼号を起動させる。そして、オープン回線で（豊北、美祢に、展開する部隊にも中継される）指揮下にある将兵達に告げる。

「反抗作戦を開始する。目標は九州の奪回だ。全軍抜刀、全軍突撃（オール ハンドウ ガンパレード）我に続け！」

厚志は、戦場を駆ける風となった。その動き、まさに絢爛舞踏。息をするように幻獣を葬っていく。

その心中には、1つの約束があった。彼が愛した少女との、果たされることのない約束が……

「舞、熊本に帰ってきたよ」

厚志の前には、小さな墓が3つ並んでいる。

「だが、僕の戦争はこれからだ。僕は世界を征服する。芝村ではなく、速水厚志として…… それでも、ついてきてくれるかい？」

厚志が振り返ると、反抗作戦に参加した、旧5121小隊のメンバーが立っている。

そして、だれも厚志の言葉を否定する者はいない。

「それじゃあ、行こうか。世界を取りに……」

青の伝説 反抗作戦開始（後書き）

ダイジェスト版みたいな作品に、お付き合いありがとうございます。

今回は、夢散幻想にガンパレの世界設定、速水厚志の伝説の魔王、設定を利用しています。

この後、速水は魔王として第5世界に君臨するわけです。

次は、短編（速水×舞）の話を考えています。

では、次回作『BOULEVARD』で、お会いしましょう。

※伝説の魔王の設定について

熊本城攻防戦において舞を失った速水は覚醒。軍部で瞬く間に出世し、政界にはいる。その後、セプトトリオンと芝村一族を全員処刑し、第5世界の魔王として君臨。舞によく似た人間を何万人も探し出しては、はべらせ、40年もの独裁政権を打ちたて専横をほしいます。

BOULEVARD (前書き)

タイトルの意味は（仏）・・並木のある大通り

良いタイトルが思いつかなかったので、作中にある桜並木からつけました。

内容とは、ほとんど関係なし（笑

速水×舞のカップリングです。

BOULEVARD

「厚志、あと15分だ」

「……うん……」

厚志の頭を、白魚のような綺麗な手がなでる。
しかし、厚志は別のことを考えていた。

4月1日。

例年より、気温が低く、桜前線の北上も、遅れていた熊本も、やっと桜が満開となった。

そんな昼休み、舞と厚志は桜並木のある、大通りに面した小さな公園にきていた。

舞、手作りの弁当を食べた後、芝生に寝転びながら、厚志は昨日、森に言われたことを考えていた。

「ひとつ、聞いてもいいですか」

士魂号のコックピットから降りた厚志は、3号機整備士の森に、呼び止められた。

「何、僕でいいの」

厚志は、首をひねりながら言う。

今日の戦闘では、士魂号に傷ひとつ付けていないはずだし、5回目シルバースードも取れた。よく「簡単に、壊さないで下さい」と小言を言われることもあるが、今日はそういうことでは無いはずだ。

「どうすれば、あんなふうに動かせるのですか？」

「えっ」

あまりに予想外の言葉に、厚志は絶句した。

「あなたの動きは、士魂号のスペックを、遥かに超えているんです。あんな機動をすれば関節や人口筋肉をやられます。しかし、士魂号に異常はありませんでした。どうすれば、あんな動きが出来るのですか？」

しかし、厚志は森の話を聞いていなかった。ただ森の目を見ていた。ラボにいた頃、研究員たちが自分に向けた目。化け物を見るような目。

厚志は、振り返ると走って逃げた。自分に向けられた視線から逃げた。

「厚志っ！」

大声と同時に、戦術教本で頭をはたかれた。

「たわけ！午後の授業に遅れる。二人して極楽とんぼでも取るつもりか」

「ごめん。あんまり気持ちよかったから」

厚志は、舞の膝枕に別れを惜しみつつ起き上がった。

大通りから吹いてくる、桜の花びらを含んだ風が頬を撫でる。

「舞、僕達の撃墜数、知ってる？」

「226だ。あと、10日もあれば絢爛舞踏に手が届くな」

厚志は、何も答えない。

「昨日、森が言った事を気にしているのか」

「聞いていたの」

「厚志。背筋を伸ばし胸を張れ、そなたの持っている力は恥じるべきものではない。弱き人々の未来を切り開くための力だ。その力ゆえ人々が離れても、私だけは、そなたと共にあろう。自分自身と私を信じよ、私はそなたを裏切らぬ」

舞の黒髪が風に流れる。その姿は自信に満ち溢れ、凜とした美しさがある。厚志はその美しさに、目を奪われた。

「舞……」

厚志は、舞を抱き寄せ、唇を重ねた。そして、力いっぱい抱きし

めた。

「ごめん。もう少し、このままで……」

二人を祝福するかのように、桜の花びらが舞っていた。

END

BOULEVARD (後書き)

しかし、また絢爛舞踏関係の話です。

というか、絢爛舞踏がらみの話しかかいてない気がする（汗

次回は、瀬戸口×壬生屋の話、『記憶』でお会いしましょう。

記憶 What she hoped for. (前書き)

瀬戸口×壬生屋で書きましたが、瀬戸口×椿姫になってしまった作品。

椿姫についてはあとがきにて。

記憶 What she hoped for.

空中要塞スキュラのレーザーが1号機に直撃した。

「みおちゃん、応答してなの」

ののみの呼びかけにも、1号機パイロットの壬生屋から応答はない。オペレーターの瀬戸口が、指揮車を飛び出していく。

「瀬戸口君、待ちなさい」

司令の善行の声も無視された。仕方なく、善行がマイクを握る。

「1号機大破、パイロットの生死不明。今、瀬戸口十翼長が向かっています。各員、1号機周辺の安全を確保して下さい。若宮戦士、もし、壬生屋十翼長の戦死が確認できた場合は、瀬戸口十翼長を指揮車まで連れ戻して下さい」

「了解」

両足を失い、焼け焦げた土魂号が、横たわっていた。装甲こそ焼け焦げているが、コックピットブロックは原型を留めている。

「壬生屋、無事か。返事しろ」

瀬戸口が、コックピットハッチを叩いて叫ぶ。だが、返事はない。コックピットハッチを開こうとするが、融解し歪み、開かない。

瀬戸口は、ハッチの隙間にカトラスを差込、力を込める。

コックピットハッチがきしみ、一際大きな音を立てて開いた。

「壬生屋！」

コックピット内は、サウナのようになっている。その中に壬生屋が横たわっていた。

瀬戸口は壬生屋を、コックピットから引きずり出し、首筋に手をあてる。少し速いが脈を感じ取れ、呼吸もある。

安堵のため息をつき、瀬戸口は通信機を口に当てる。

「壬生屋十翼長の生存を確認。これより離脱する」

「キョキョキョキョキョ」

通信を終える前に、奇声が響く。振り向くとゴブリンが5匹、両腕を振り上げている。その手に握った得物があやしく光る。

瀬戸口は腰に手をやった、しかし、そこにあるのはカトラスが1本。指揮車から飛び出してきた為、他の武器を置いてきたらしい。

瀬戸口は、カトラスを構えた。気を失っている壬生屋を守り、5匹のゴブリンを倒さねばならない。

「力が使えないのはきついが、通してもらうぞ」

瀬戸口は、ゴブリンに切りかかった。

「ぐはっ」

2匹目を切り倒したところで、背後から切られた。その衝撃に瀬戸口が前のめりに倒れる。カトラスが手を離れ、1メートルほど前に転がる。

すぐに、起き上がろうとするが、ゴブリンがのしかかってきた。身動きができない。

「キョキョキョキョキョ」

完全に押さえ込まれた、こうなっては人間の力ではどうしようもない。瀬戸口は、覚悟をきめた。

「すまん、壬生屋」

「キョキョッ？」

突如、瀬戸口にのしかかっていたゴブリンの首が飛び、赤い血液のシャワーが降り注ぐ。

瀬戸口が、顔を上げると迷刀鬼しばきを構えた、壬生屋の姿があった。

「み、壬生屋か？」

瀬戸口が、呻くように問うが、壬生屋の様子がおかしい。

「お立ちなさい。祇園童子！ 貴方の力は、そんなものではないはずです」

「椿……」

瀬戸口を祇園童子と呼ぶその声に、はるか昔に別れた佳人の名を口にしていた。

「そうだ、やっと気が付いたか、キッド。いや、気付かぬふりをしていただけ、だな」

巨大な猫が、瀬戸口の脇に現れる。5121小隊のマスコットの存在のブータだ。

「おっさん」

「さあ、我らの姫に助太刀しようぞ」

「ああ、まだ死ねなくなつた」

「椿……」

「いいえ、今の私は、壬生屋 未央です。あなたが、瀬戸口 隆之であるように」

「だが俺は」

椿は瀬戸口の言葉をさえぎる。

「あなたには、知られたくありませんでした。わたくしは、まだ自分の気持ちをも、何も言っていないから」

瀬戸口に向かって微笑む。

「その時は、ちゃんと答えてくださいね」

そして、ブータをそっと抱き上げた。

「わたくしの最後の願いを、守ってくれたのですね。ありがとう、ネコ大将。お願いついでで悪いのだけど、わたくしの記憶を封印してください。昔の記憶なんて邪魔ですから」

「姫…… 御意、仰せのままに」

「さようならです。童子、いえ、瀬戸口君、昔のことは忘れてください。もう、あなたを、縛るものはないのだから、あなたは自由です」

「起きんか！このたわけ共！」

芝村 舞の大声で、壬生屋と瀬戸口は目を覚ました。

周りを見回すと、5121小隊の面々が遠巻きにして見ている。

「我らが、どんなに心配したと思っている。それなのに、そ、そ、そんなことをしているとは、こ、こ、こ」

怒りのためか、それとも他の理由があるのか、舞が顔を真っ赤にしている。

壬生屋は、まだはつきりしない頭で、自分を見た。

すると、瀬戸口の腕が背後から回り、まるで包み込むように抱きついている。ずっとこのままの格好だったらしい。

壬生屋の顔がみるみる真っ赤になる。そして、壬生屋が、瀬戸口の頬を引っ叩く。

「不潔です！わたくしの意識が無いことをいいことに」

「ちょ、ちょっとまで、俺はおまえを助けにいった」

「問答無用！あなたを成敗して、わたくしも自害します。覚悟なさい」

瀬戸口は逃げ出した。周りからは無責任な歓声があがった。

椿姫の願いが、叶うのはまだ先になりそうである。

記憶 **What she hoped for.** (後書き)

最後までお付き合いありがとうございました。

瀬戸口×壬生屋の予定で書きましたが、瀬戸口×椿姫になってしまった作品(笑)

そのため瀬戸口×壬生屋は、後日書き直しております(汗)

椿姫はドラマCDに登場した先代のシオネ・アダラ(以下、シオネ)です。人族の代表が、その名を語る。

壬生屋は、椿姫の記憶継承体(転生体)です。

そして、瀬戸口は『鬼』と呼ばれる幻獣の一種で、先代のシオネに仕えた戦士の一人。

ブータは、猫神族の英雄で先代のシオネに仕えていた。椿姫からは『猫大将』と呼ばれていた模様(5121小隊にいるブータは、芝村家で飼われていた、ただのニャンコとの情報も)

Her determination (彼女の決意) 映

親友が、死んだ……

とてもやさしい娘で、強い娘だった。

スキュラのレーザーの直撃を受け、骨すら残らなかった。

何も入っていない棺。

私は、葬儀場を出た。

彼女の魂は、ここには無いと思ったから……

悲しいはずなのに、涙は出なかった。

親友の机の中をかたづけろ。

もう使われる事の無い、教科書や筆記用具。

その中に、それは入っていた、1枚の写真が……

「映、どうしたの」

ルームメイトが声をかけてきた。

彼女に向かって、写真を差し出す。

「ああ、たしか、速見 厚志くん。親衛隊もあって人気あるのよ。

この間、アルガナ取ったって騒いでいたわ」

盗み撮りなのだろう、目線は他のほうを向いているが、ぽやんとした感じは伝わってくる。

私は、写真の男の子に、速見 厚志くんに、会ってみようと思った。あのアルガナの英雄に。

「君、プレハブの人だよね」

「はい、そうですけど」

人のよさそうな男の子は、嫌そうな顔ひとつせず答える。

写真と同じように、ぽやんとした感じがするが、彼の瞳から自信と強さが感じ取れる。

そう、親友だった、あの娘と同じように……

「私、悠木 映。あきらと呼んで」

「速水です。速水 厚志」

それから、20分ほど彼と話をする事ができた。そして、私の最後の問いに、彼はこう答えた。

「僕は、ここに、5121小隊に来たから強くなれた。守りたい人達が出来たし、そばにいてほしい人ができた。僕はその為に戦うんだ。もし、皆が言うように、僕が世界を救うとしたら、それは結果だよ」

私は、屋上にやってきた。あの娘とよく来た場所。景色を見ながら、たあいも無い話を何時間もした。

グランドを、見ると5121小隊の人達が走っていた。速水君の姿も見える。

「ねえ、私も誰かのために戦いたい。と言ったら、あなたはなんて言うかな？」

もちろん、返事は無い。

「よし、私はパイロットになる」

誰もいない屋上で、宣言する。

この決意は、YESだ。たとえば、あの娘と同じ道を歩んだとしても、きっと後悔はしない。

私が、自分で選んだ運命。

なぜか、涙が零れ落ちた。脳裏に浮かぶのはあの娘の顔。

でも、私の中のあの娘は、この決意を祝福するように微笑んでくれた。

Her determination (彼女の決意) 映 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

今回は、悠木 映ちゃんのお話。

ゲーム内での、この娘の登場も衝撃的（まさか隠れキャラ？と思いました）でしたが、結末も衝撃的でした。

学校でラブコメしても、主人公たちは戦争をしてると思います。知らされたイベントでしたもの。

続けてきたガンパレ短編も残り4本となりました。

速水×舞が2本

瀬戸口×壬生屋が1本

速水×森が1本

の内訳です。

宜しければ、最後までお付き合いよろしくお願いします。

絢爛舞踏 速水×舞

「幻獣、撤退します」

指揮車の中に瀬戸口の声が響く。しかし、いつものような歓喜の声は無かった。

「司令。速水機、撃墜数41。総撃墜数313」

善行は、そのことについて、何も言わなかった。

「全機、帰投して下さい」

瀬戸口は速水機に回線を繋ぐ。

「速水、一度しか言わないよく聞け。愛を忘れるなよ。愛さえ忘れなければ、どんな状況でもどうにかなるさ」

厚志がいつもの様に登校すると、道を歩いていた人々が左右に寄った。人が割れ厚志の前に道が出来た。そして、その顔には恐怖と嫌悪の色が浮かんでいる。

厚志はため息をつく。昨日テレビに出てから万事この調子だ。

「フッフ、俗人のやっかみや恐れなど気にする必要はありません」

「い、岩田君」

いつものまにか、厚志の隣でいつものように腰をまわしている。

「人は、本能的に異能者を恐れるのです。それが、たとえばあなたでもね」

「岩田君、言いたいことは分かったけど…… 説得力ないよ」

「イイではありませんか。そんなことは、さあ行きましよう我らの学び舎へ」

厚志は少しだけ笑った。

昼休み、厚志は公園の桜の木の下で昼寝をしていた。ひらひらと舞い降りるピンクの花びらが幻想的な美しさを描き出している。

5121小隊の面々の反応も外とあまり変わらない。少し一人になりたかった。

すぐ横には、舞の手作り弁当と来須が投げてよこしてくれた弁当があるが、まだ手をつけていない。

舞はいつものことだとしても、来須は彼なりに気を使ってくれたのだろう。

投げた後に「幻獣が死ぬたびに助かる命もある。他人の言うことなど気にせんことだ」と言ってくれた。

不意に厚志の顔に笑みが浮かぶ。

僕は何をやっているんだ。覚悟ならできていたはずじゃないか。人でないものになる。そして、自分の大切な人々を守る。別に感謝されるためじゃない。そう、感謝されるためでは……

あの日に、悠木 映が戦死した日に決めたではないか。弱き人の盾となり剣となる。

タトエ、バケモノニナツテデモ……

厚志は起き上がると、舞の手作り弁当に手を伸ばす。うん、おいしい。初めの頃は焦げていたり、味が濃すぎたりしたものだが、短期間の進歩はたいしたものだ。

厚志は、幸せそうな顔をして弁当を咀嚼する。

「厚志！」

舞の声が響く。厚志はいつもの、ぼやんとした顔で振り返る。そこには、肩で息をした舞が立っていた。

「舞、どうしたの？」

「いや、昨日から様子がおかしかったからな。探していた」
息を切らしながら答える舞。

「ごめんね舞。もう大丈夫だから」

「気にするな。死を呼んで舞う美しき化物よ。人を守るために人ではないものになったのだろう」

「舞！」

「まだ気にしているではないか」

厚志の様子をみて、舞が言った。その顔には不安げな表情が浮かぶ。

「……厚志、私が居るだけでは、ダメか。そなたのそばに居るのが、私だけではダメか。私は……」

顔を真っ赤にして必死に訴える舞に、厚志は優しく微笑む。

「わかってるよ、舞。君さえそばにいてくれたら、僕は世界でも敵にまわせる」

『201V1、201V1全兵員は現時点を持って作業を放棄。可能な限り速やかに教室に集合せよ。繰り返す……』

突然、多目的結晶から召集がかかる。

厚志の顔を見た舞が笑う。

「フッ、厚志、やはりお前は化物だ。今、どんな顔をしているかわかるか？ 血に飢えた狼のようだぞ。安心した。世界広しといえどお前の傍に居られるのは、私だけだ。死が二人を分かつまで、共にあろうぞ」

舞が、手を差し出す。

「うん、死が二人を分かつまで」

舞の手を握り厚志が走り出す。新しい未来を掴むために。

絢爛舞踏 速水×舞（後書き）

最後までお付き合いありがとうございました。

当時、観覧舞踏章を取った後の話を、というリクエストに答えて書いてお話です。

ゲームで初めて絢爛舞踏取った時は、周りのリアクションにショックを受けましたよ。殺人鬼か化け物扱いですもの。

では次回は、この話の舞視点からのお話です。

貴方の傍に（絢爛舞踏、舞サイド）

昼休み、中村、滝川、新井木、壬生屋の四人が、一組の教室で弁当を広げていた。

教室の奥のほうでは、瀬戸口とののみが仲良さげに弁当を食べていて、壬生屋がちらちらと視線を送るのもいつものことだ。いつもとちがうのは、芝村舞が自分の席に座りなにやら難しい本を読んでいる事だ。机の上には手をつけていない弁当が置かれている。いつもなら恋人の速水厚志と一緒にはずだが、速水の姿は見えない。たしか午前の授業は、受けていたはずだ。

「まさか、ウチから化物が出るとは思わなかったたい」

中村が、メシを口に詰め込みながら言う。

「私でも、あの方の正面に立つのは、怖いですから、他の人はなおさらではありませんか」

「あ、みぶちゃんも…なんだか、心臓を、鷲掴みされているみたいだよね」

「俺なんか、撃墜数三十四だぜ、もう、三百二十超えているもんな、あいつ」

「滝川が、普通たい。あのスコアは異常。こんな短期間では、人間には無理ばい」

自然に、一昨日の戦闘で撃墜三百を超え。昨日、絢爛舞踏を受章した速水の話になる。

ここ一ヶ月、一緒に戦った戦友であり友人でもあるが、怖いものは怖かった。

それが、自分一人じゃないことに気がついたせいとか、この話題を止めることができなかった。

「今朝、厚志くんにぶつかったときは、本当に怖かったんだから、いつものように笑っていたけど…」

バン！

舞が、読んでいた本を、机に叩きつけた。教室内にいた者ばかりか、廊下を歩いていた者も、何事かと舞に視線を向ける。

「そなたら、よくそのような事が言えるな。壬生屋、滝川、敵に囲まれて孤立したのを、何度、厚志に助けられた。新井木、中村、補給車がキメラの集中砲火を受けたとき、そなたらの盾となり怪我まですしたのは誰だ。やつは： 厚志は： ただ臆病な人間だ。自分が好きな人間に死んで欲しくなかったから、強くなるしかなかった。誰かが死ぬのが怖かったから、皆を守るために人を捨てた。確かに、厚志が勝手にやったことかもしれぬ。でもそんな厚志に頼らなかったか、窮地に陥った時、厚志がどうにかしてくれると思わなかったか。厚志を化物にしたのは、我々だ」

「舞ちゃん……」

いつのまにか、ののみが舞の制服の袖を、引っ張っていた。

「ののみ…… 許すがいい。熱くなりすぎた。思想、言論を統一するなと厚志に言ったのは私だったな」

そう言うと、舞は教室から出て行った。

「なんなのよーあれ！」

新井木が声を上げる。

「本当に、いきなり割り込んできて」

壬生屋も続く。

「まあ、そう言うな。芝村の姫さんも、だいぶ変わったじゃやないか」

今まで、黙って見ていた瀬戸口が、笑いながら言う。

「どこがー」

「どこがですか」

新井木と壬生屋の声が重なる。

「この間まで、自分の事だって、関心無さそうだったろ」

そこにいた全員が頷く。

「それが、恋人の速水の事とはいえ、ここまで感情的になるとは思わなかった。それが、いいことなのか、悪いことなのか、まだわか

らんが、速水の事も温かい目で見守ってやれ。あいつは何が大切なのか、ちゃんとわかっているさ」

教室から出た舞は、階段を下りたところで岩田に出会った。

「おや、舞さん、誰かお探しですか」

「厚志はどこにいる」

「速水君なら、その公園のほうに歩いていきましたよ」

「わかった。礼を言う」

駆け出そうとした舞の前に、岩田がすばやく回りこむ。

「ちよっと待ってくださいーい。少しの間、彼を一人にしておきませんか」

「何故だ」

「彼も、皆の態度に戸惑っていることでしょう。一人で考えることも必要ですから」

「どけ、芝村は誰の指図も受けない。私が会おうと思ったら実行に移すのみ」

岩田を、かわして公園に向かおうとする、舞の目の前に岩田が奇妙な体さばきで回り込む。

岩田から逃げようとする舞に、追いかけて進路を塞ぐ岩田。かくして、壮絶な追いかっけが始まった。

「はあはあ」

舞が、肩で大きく息をする。結局、岩田を撒いたのは三十分もあとのことだった。

「あの、たわけが、どうやったら、あの様な動きでついてこれるのだ。いらぬ時間をくった」

気が付いたら、いつの間にか目的の公園についていた。ゆっくりと、公園内を見回す。一際、大きな桜の木の下に、速水がいた。な

んだか、見ているほうが幸せになるような笑顔で、舞が渡した弁当を食べている。

「厚志！」

舞が呼ぶと、ぽやんとした、いつもの笑顔に向けた。

「舞、どうしたの」

言いたい事は、山のようにあったが、厚志の顔を見たたん、全部、すっとなでしまった。

「いや、昨日から様子がおかしかったからな、探していた」

自分の頬が、少し赤くなるのが分かった。

「ごめんね舞。もう大丈夫だから」

そう言うと、春の風のように笑う。

「気にするな。死を呼んで舞う美しき化物よ。人を守るために人ではないものになったのだろう」

厚志の笑顔が硬直する。

「舞……」

「まだ、気にしているではないか」

厚志の顔を見つめながら、舞がすねたように言う。自分に、何も話してくれないことが、悲しかった。自分だけには、その胸の内を話して欲しかった。だから、怒らせるようなことを言ってみた。

二人の間を沈黙が、支配する。だが、その沈黙に耐えられなかったのは、舞のほうだった。

舞は、自分は弱くなったのかもしれない。と、心の中で独白する。

「……厚志、わ、私が居るだけでは、ダメか。そなたの傍にいるのが、私だけではダメか。私は……」

顔が、真っ赤になっていくのがわかる。その裏で、厚志に拒否される事に恐怖した。

「わかってるよ。舞」

言葉が続けることが出来ない、舞の目の前に厚志の笑顔があった。そして、その後につづいた台詞は、舞が望んだものだった。

「君さえ、傍にいてくれれば、僕は幻獣だけで無く、世界でも敵に

回せる」

『201V1、201V1。全兵員は現時点を持って作業を放棄。可能な限り速やかに教室に集合せよ。繰り返す…』

突然、多目的結晶から召集がかかる。

厚志の顔が、いつもの優しげな顔から厳しいもの、いや、人をひきつけてなお恐怖させる顔に変わる。その恐ろしくも美しい横顔を見て、確信した舞の口から笑みが漏れる。

「フッフ、厚志、やはりお前は化物だ。今、どんな顔をしているかわかるか。血に飢えた狼のようだぞ。安心した。お前の傍にいられるのは私だけだ。どんなに世界が広かろうと私だけだ。死が二人を分かつまで共にあろうぞ」

不思議な高揚感と共に、舞は、手を厚志に差し出す。

「うん、死が二人を分かつまで……」

厚志が、舞の手を握り教室に向かって走り出す。

その光景を見たものがいたら、あの歌の歌詞を思い出しただろう。突撃軍歌、ガンパレードマーチを……

今なら私は信じられる あなたの作る未来が見える

あなたの差し出す手を取って

私も一緒に駆け上げよう

幾千万の私とあなたで あの運命に打ち勝とう

はるかなる未来への階段を駆け上がる

私は今一人じゃない

全軍抜刀 全軍突撃

未来のためにマーチを歌おう

そう、彼らは、その手を血に染めながら戦い続ける。新しい未来をつかむ為に、戦い続ける。

1999年4月、人類は、まだ先の見えない戦いの中にいた。

貴方の傍に（絢爛舞踏、舞サイド）（後書き）

今回も読んでいた抱いたことに感謝を。

前回の話を芝村舞サイドから書いた作品です。
細かいところが違うのは愛嬌ということ。

次回は瀬戸口×壬生屋で、さらに絢爛舞踏がらみです。

絢爛舞踏 迷い 壬生屋×瀬戸口

降りしきる雨が、まるで煙幕のようにあたりを包む。接近戦を得意とする壬生屋にとっては救いの雨になる。

キメラのレーザーが直撃するが、雨のせいで威力の落ちた攻撃では装甲表面にわずかな傷を残すだけだ。

目の前に現れたミノタウロスのパンチをかいぐり両断する。敵の動きがはっきりと見える。

ピッと意識の隅で電子音が鳴るのが聞こえた。それを無視して更に一振りで、キメラと隣接していたゴブリンを切り伏せる。ピッピッと続けて電子音が鳴る。

「壬生屋ちゃん。調子良さそうじゃないか」

オペレーター瀬戸口からの通信が入る。軽い瀬戸口の声に腹が立った。

「今は、戦闘中です。必要なことだけ報告してください」

「わかった。滝川が包囲されてしまった。援護してやってくれ。3時の方向300mだ」

「了解」

短く言うと士魂号を走らせた。

壬生屋の一号機がゴブリンを蹴り飛ばし、左右の手に持った超硬度大太刀でキメラやゴルゴーンを両断していく、幻獣が霧散するたびに、ピッと電子音が鳴る。

一号機が、ミノタウロスに斬りかかる。壬生屋の視界の端にカウンターが見える。数字は299。

一号機の太刀先が鈍り、そしてミノタウロスはその隙を逃さなかった。至近距離で生体ミサイルが発射される。壬生屋は後悔する間もなく、シェイカーに放り込まれたような衝撃を受けた。

「壬生屋機、大破。パイロットの生死不明」

瀬戸口の声が、指揮車内に響く。しかし、間髪いれずに滝川からの通信が入った。

「こちら滝川。壬生屋さんの脱出を確認。回収した後、補給車までさがる」

「了解。敵も撤退を始めた。気をつけて戻れ」

この日の戦闘は人類の勝利で終わった。しかし、雨はまだやみそうにない。

「先輩。一号機はもう駄目ですね」

森に呼ばれた原は、不機嫌そうだ。

「しかたないわね。明日、新型機が届くわ。それを、一号機に回しましょう」

「いいのですか。あれは使わないと……」

「今から陳情したのでは、いつ届くことか。それに士魂では役不足ね。皆が生き残る為に、壬生屋さんには士翼号に乗ってもらいましょう」

森が言いにくそうに口を開く。

「けんらんぶどう絢爛舞踏…… ですか。あと、ひとつで……」

「そうね」

ハンガーの中には、雨が屋根を叩く音だけが響いていた。

隊長室裏、木の下に壬生屋が傘もささずにたたずんでいた。胴着が張り付く感覚は気持ち悪かったが、その冷たさは心地よかった。

愛用の日本刀に手をかけ構え、目を瞑る。ゆっくりと深呼吸して…… 一閃。

雨の雫が銀色の光を残し、飛散する。

ゆつくりと日本刀を鞘に収めた壬生屋に、傘が差し出された。

「何やってんだ、あんたは。体調管理もパイロットの仕事の内だと思いが……」

瀬戸口が、あきれたような顔で立っていた。

「……………」

「恋人の、俺にも言えない事か？」

「あなたは、絢爛舞踏をどう思いますか」

しばらくの沈黙。瀬戸口にはびしょぬれの壬生屋が泣いているように見えた。

「それで、剣先が鈍って、土魂を大破させたのか…… あんたがすぐに怒ったり、俺をグーで殴ったりするのは、今さら変わらんだろう。それと同じだ。あんたが変わらん限り化物には、ならないだろうさ」

壬生屋は俯いたままだ。

「それで、どうしようもなくなった時は俺が殺してやるよ。少しは自分が好きになった男の言う事を、信じたらどうだ」

壬生屋が、瀬戸口の胸に飛び込む。

「ごめんなさい。服を濡らしてしまっ、でも、でも、少しこのままですませてください」

瀬戸口が壬生屋の瞳からこぼれた涙を、指で拭ってやる。

「大丈夫だ。俺がついている」

整備員詰所にベッドの上に壬生屋と瀬戸口の姿があった。

壬生屋は瀬戸口の腕を枕にして、小さな寝息を立てている。

瀬戸口は、乾かす為にぶら下げられた、壬生屋の胴着と自分の制服を眺めながら、物思いに耽っていた。

初めの頃は壬生屋を見るたびに、イラついたものだ。余りにもあの人に似ていたからだ。幻獣を狩る姿はまさに瓜二つ。

その壬生屋が絢爛舞踏まであとひとつ。いや、人の定めた絢爛舞踏章など意味はない。今の壬生屋の能力は絢爛舞踏そのものだ。300狩らなくても、精霊達も絢爛舞踏と認めるだろう。

壬生屋を守るため、この先は、鬼の力も使わねばなくなる。

「やれやれ、俺は人でいたいのだがなあ」

「瀬戸口くん……」

「ん、起きたか」

寝ぼけた瞳で、瀬戸口を見つめる。しばらく見つめた後、自分の姿に気がついたのか、顔を真っ赤にして毛布の中に隠れる。

「せ、せ、瀬戸口君」

瀬戸口が毛布ごと、壬生屋を抱きしめた。壬生屋の顔はこれ以上ないほど真っ赤だ。

「はは、かわいいやつだな。いつもこうだと俺も楽なんだがなあ」

「な、何、言っているんですか。放してください。誰かが来たらどうする気ですか」

「大丈夫だ。あと2時間は誰もこないさ。整備士達も徹夜だろう」

「でも……でも、ダメです」

壬生屋が瀬戸口を、思いつき突き飛ばす。不意をつかれた瀬戸口はベッドから転げ落ちて動かなくなる。どうやら、打ち所が悪かったらしい。

「せ、瀬戸口君？」

壬生屋の呼びかけにも返事は無い。壬生屋が覗き込むと瀬戸口が白目をむいて倒れていた。

指揮車で瀬戸口が、次々と機器を立ち上げていく。

「ふえええ、たかちゃんどうしたんですか？」

額に、包帯を巻いている瀬戸口に、ののみが訊ねる。

「いや、ベッドから落ちただけだから」

「整備員詰所でね」

メガネをかけながら、善行が言う。

「司令。何処まで知っている？」

瀬戸口の顔が怖い。

「我々、奥様戦隊善行の情報収集能力を、甘く見てはいけません。

あなたが壬生屋さんに突き飛ばされて、ベッドから落ちて白目を剥いたなんてことは、調査済みです」

「司令。戦闘が終わったら顔を貸してくれないか」

「どうするつもりです」

善行が、不敵な笑みを浮かべる。

「忘れるまで殴る」

「何をやっているか。たわけども。敵が来た。前衛接触まで180秒」

芝村舞からの通信が入る。

「了解なのよ」

ののみが返事をする

「壬生屋ちゃん、新型の調子はどうだ」

「士魂より、乗りやすいです。大丈夫やれます」

「そうか。無理はするな」

「しれー、せつしょくまで60秒」

ののみが報告する。

「瀬戸口君。昨日、言った事、覚えていますか」

「ああ、覚えているが、どうかしたか」

「いえ、何でもありません。確認しただけです」
しばらくして。

「前衛部隊、敵と接触」

善行が立ち上がり命令を下す。

「全軍突撃。士魂で敵、左翼部隊に楔を打ち込みます」

命令と同時に、壬生屋の士翼号が駆ける。敵陣形に飛び込み、次々と穴をあけていく。その姿は、まさに死を呼ぶ舞踏。

幻獣を狩る士翼号を、瀬戸口は美しいと思った。

『人型戦車その優位性の研究』より抜粋。

1999年5月、人類は幻獣に対して勝利を収める。

この戦争において、人型戦車を有する5121小隊は3人の絢爛舞踏章の授章者を出し、戦死0と言う記録を残す。

民間の記録に、竜を倒したという報告と、もう1つ、『破邪』のパーソナルマークをつけた機体は3000以上の幻獣を狩り、その横には鬼の姿があったと言う報告がある。が両方とも噂の域を出ない。そして5121小隊の隊員たちは、この2つの事柄について口を開くことはなかったという。

絢爛舞踏 迷い 壬生屋×瀬戸口（後書き）

今回も最後まで読んでいただきありがとうございます。

ゲーム中で士翼号に壬生屋を乗せると大変なことになります。すごい勢いで敵の中に突っ込み、フルボッコにされています（笑）士魂号の時ですら、追加装甲を2個貼り付けて重しにしてみましたからねえ（笑）

奥様戦隊善行について

ゴシップ好きの人たちの集まり。活動内容はうわさ話を奥様言葉で交し合う。

「ねえ奥様。お聞きになりました？」 「速水さんったら降られたらしいですよ」 こんな感じか？
メンバーは善行、原、若宮の3人。

次回で最後の短編となります。

獅子の勲章（前書き）

今回で短編集も最後のお話となります。

獅子の勲章

速水厚志は、人気の無いハンガーに足を踏み入れ小首を傾げた。

19・00時、この時間ならば整備員達が忙しく働いている時間なのだが、今日は誰もいない。

とりあえず、搭乗機である士魂号複座型に歩み寄る。コックピットから機体情報を引き出すと整備は万全だった。昨日の戦闘で少なからず損傷を受けていたのだが、細かい調整に至るまで終わっていた。このまま戦場に出ても100%の性能を発揮するだろう。

「すごいな、これは…」

思わず言葉が漏れた。整備員達は恐らく徹夜だったはずだ。そのことを思えば頭が下がる。

コックピットから這い出すと、山積みになされた資材の陰に人影が見えた気がした。

「？」

人影に近づくと、資材の山にもたれるようにして、複座型の整備員、森精華が寝息を立てていた。

その無防備な姿に、苦笑を浮かべる速水。

「森さん。起きて、こんな所で寝てちゃ、風邪引いちゃうよ」

肩をゆすると森が目を覚ました。まだ寝ぼけた目で速水を見つめる。たっぷり十秒ほどそうして、森の瞳が驚きに見開かれる。

「は、速水君！」

「風邪、ひいちゃうよ」

速水は、いつもと変わらない、ぼやんとした笑顔を浮かべた。

「ご、ごめんなさい。私」

「謝ってもらうことはされてないよ。それに、謝るのは僕のほうだよ。ごめん。そして、ありがとう」

突然のことに森がうろたえた。

「え、え、私…」

「食べる？」

速水が、ポケットから布に包まれたクッキーを差し出す。

「あ、ありがとう」

そう言って、ひとつつまむ。合成甘味料が主流の現在だが、そのクッキーは本物の砂糖の味がした。

「ほら、最近僕等、士魂号壊してくること多いから…戦局も悪化して補給もままならないのに、いつも100%の整備をしてくれている。ありがとう、感謝している」

「あ、いえ、その…その言葉を聞いたら、皆喜びます」

「ところで、みんな何処にいったの？」

「イ号作戦…いえ、聞かなかったことにして下さい」

森の表情からすると、聞かれても答えられない事柄らしい。

「それじゃ、本題。今度の日曜日あいてる？」

「え、あ、はい。あいています」

「瀬戸口君からプールチケットを貰ったのだけど、一緒にいかない？」

「わ、私ですか？」

「ここには、僕と森さんしかいないと思うのだけど」
にっこりと速水は笑った。

「本当に、私でいいんですか？」

「おかしなことを聞くんだね。僕は、森さんと一緒に行きたいと思っ
っているんだけど…ダメかな？」

森がフルフルと首を横に振る。

「はい、決まり。それじゃ日曜日に校門前に9時でどうかな？」
コクンと頷く森。

「それじゃ、楽しみにしているね」

そう言って、森にクッキーを包んだ布を握らせ、速水がハンガーから出て行く。

後に残された森は、朱が差した頬をつねってみた。痛い。どうや

ら、夢ではないらしい。

「速水君とデート……」

森の顔が更に真っ赤に染まった。

熊本城攻防戦、後にそう呼ばれる戦いの中に5121小隊もいた。

「3番機来るわよ。準備して」

原の声に整備員達がキリキリと動き回る。

「補給お願いします」

速水の声が、ヘッドセットから聞こえた。もう何度目の補給になるだろうか。今日だけで100以上の幻獣を狩っている。

「差し入れです」

速水と舞は、森からサンドイッチと水を受け取る。

「大丈夫ですか？」

森の問いに速水が笑いながら答える。

「少し、きついな」

しかし、森から見て速水は体力の限界を過ぎ、気力だけで戦っているように見える。

サンドイッチを水で無理矢理胃に流し込む姿が痛々しい。

「森さん、約束覚えている？」

「こんな時に何を……」

「こんな時だからだよ」

「うん……」

赤くなった森を見て、速水は微笑んだ。

「そんなことより、ちゃんと帰ってきてください。私たちは、パイロットが必ず帰ってくると信じているから、送り出せるんです」

「……帰ってきたら、キスしていい？」

「……な、な……なったらこと言うですかっ」

「あら、いいじゃない。約束してあげたら」

原が会話に割り込んできた。

「先輩……」

「それで、速水君が無事帰ってくるのなら安いものよ」

そう言って森を見る原と速水。

「もう、わかったわよ。でも、ちゃんと帰ってくるんだからね。怪我も、ダメだからね」

「了解！」

ハッチが閉じる。

「3番機、準備よろし！」

原の報告の後、善行から通信が入った。

「再出撃を許可します」

「了解！3番機、これより戦列に復帰します」

13…27時、3番機は4度目の補給を終えた。

「作戦本部からの通達。14…00時を持って、熊本城を放棄します。退却してください」

善行からの通信が入る。

「足の遅い戦車随伴歩兵では、退却は無理です」

速水は周りで共に戦っている、戦車随伴歩兵達を見る。今、撤退を試みても背後から狙い撃ちされるだけだ。

「彼らにも、撤退命令は出ています」

「しかし、司令……」

「我らが、10分敵を足止めする。その間に撤退するがよい」
舞が、3番機の拡声器に向かい叫ぶ。

「芝村さん……ありがとう」

「礼は不要だ。行くぞ」

たった一機のガンパレードが始まった。

ミノタウロスの生態ミサイルの直撃を受け3番機が膝をつく。

「ここまでだな…厚志、味方は安全圏まで撤退できたようだ」

既に、周りを幻獣に包囲されている。このままでは脱出も不可能だ。

「今度は、芝村さんの番だね」

「何を言っている？」

「君なら、平和な時代を作れると思うんだ…」

緊急脱出用の炸薬で、ナビゲートシートのハッチが吹き飛ぶ。

「ごめん。僕が時間を稼ぐ」

「やめろ！ うつけもー」

言い終わる前に舞がシートごと射出された。その後を追おうとした幻獣が3番機の超硬度大太刀により両断される。

「お前達の相手は、僕だ！」

「3番機に直撃、反応速度低下。神経接続切れます。3番機沈黙」
3番機の周りは小、中型の幻獣によって十重二十重に包囲され、
今から救出を送っても間に合わない。

「速水百翼長。1番機と2番機を救出に回します。それまで…」

「駄目です！司令」

速水が、善行の言葉を遮る。

「今、救援を回しても全滅します。…回線、私用に使ってもいいですか？」

「……………」

速水は、善行の沈黙を是と受け取った。

「森さん。聞こえている？ごめん。…約束、守れそうにない。……
本当にごめん……」

そこで通信が途絶えた、聞こえてくるのはノイズ音だけ。

「通信途絶。3番機大破。：パイロット戦死：」

瀬戸口の声が指揮車内に響いた。

「撤退します。急いで下さい。ここにも、すぐ敵がきます。」

「嫌！放して！私…私…」

今にも前線へ走り出そうとする森を、原と茜が押さえ込む。

「義姉さんが行って、どうなるというんだ。速水は、義姉さんが死んでも喜ばないぞ」

「そうよ。彼が何の為に戦ったのか考えなさい。引くわよ」

原と茜が、森を補給車に押し込む。

「待って…私…まだ何も言っていないの…何も伝えていない…何も…何も…」

「義姉さん…」

「速水君が、プールに誘ってくれた時も…キスしていい？と言ってくれた時…本当に嬉しかった…でも…私は何も伝えられなかった…ありがとうとも…好きですとも…何も…」

ハンガーの中に土魂号が2体と土翼号が並んでいる。

芝村舞は、早朝のハンガーに足を踏み入れた。速水厚志が戦死して3日が経っていた。

複座型の土魂号を陳情したが、補給線をズタズタにされた今、届くかどうかもあるやしい。そんな時に速水が陳情した土翼号が届いた。まだ組み立てられたただけなので調整を行わなければならない。

舞は、今日の授業をサボって仕上げようと考えていたのだが先客がいた。

「森か……」

士翼号のコックピットには整備員の森が、寝息を立てていた。舞は、森を起こさぬように、そっと士翼号の状況をモニターに映し出す。

結果から言うと士翼号は完璧に仕上げられていた。後は、パイロットである舞が自分にあつた調整を行なうだけだ。30分もかからない。

「う、うん。速水君」

「すまぬ。私だ。起こしたか」

「芝村さん！ご、ごめんなさい！私寝ぼけたみたいで……」

「かまわぬ。疲れていたのだろう。士翼号を見ればわかる。感謝を……」

森が首を横に振る。

「感謝だなんて……今は、やることがある方が、楽だから……」

「そうか。だがこんな所で眠らぬ方がいいぞ。風邪を引く」

森が小さく笑った。

「速水君にも、同じこと言われた」

森に、舞が封筒を渡した。森が封筒の中を見る。

「……傷ついた獅子章……」

「速水には身内がいなかったからな。そなたが持っているほうが、よいであろう」

森の目から涙がこぼれ落ちた。

「芝村さん。私ね、速水君に何も伝えられなかったことは後悔しているけど、速水君を好きになったことは後悔していない」

「いや。速水はそなたの気持ちに気づいていたと思うぞ。そなたの行動を見ていれば……」

「ありがとう……芝村さん」

森に礼を言われ舞の頬が赤くなる。

「礼など不要だ。機体の微調整をする。手伝え」

「ええ、わかりました。せっかくの機体ですから壊さないで下さい」

速水君、私は最後まで生き抜きます。あなたが願った平和な世界
を見るために……

獅子の勲章（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

図らずも最後の話は、主人公戦死の話になってしまいました。

舞姫も良いですが、森も萌えるものがありますよ。置き入りのキャラでした。最初に書いたカップリングでもありましたし。

このゲームは2年ほど継続して楽しめたでしょうか。ゲームでこれだけ楽しめるものも珍しい。

それだけ自由度の高い良作でした。

戦闘モノとしては2，3回プレイしてしまえば戦死者を出すどころか、幻獣が出現しなくなってしまうような難易度ですが（笑

再度、最後までお付き合いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7502c/>

ガンパレード・マーチ短編集

2010年10月8日13時18分発行